

ただ叫ぶ、叫ぶばかりだ

調子ばすれに、

ごうごうと焔のめぐみをもえたたすベル

耳をもそれて狂猛な焔とともに息せききつて警告す、

叫びは高く、高く、高く、

望みもうせて、

やけに、やけに、

休むとすれば——忽ち高く、

蒼ざめた月のほとりを

おおベルよベルよ、ベルよ、ベルよ、

おちたるベルはおお何語る

絶望の！

ああどんなにか、ほえる、かむ、叫ぶことか、

ああどんな恐れをはくか

鼓動うつ大氣の胸に！

耳は知るすべてみな、

高鳴りにより

叫びによつて

どんなにか恐れが進み、また退くか、

鳴りさわぐうち、

響きのうちに、

どんなにか、恐れが沈み、また浮ぶのか

ベルの響の浮きつ、沈みつするうちに——

ベルの、ベルの、ベルの、ベルの、

ベルの、ベルの——

ベルが響きベルが鳴つてるそのうちに！

4.

聞けよベルをうなるベルを——

鐵のベルを！

どんなにかベルの調はおごそかな思ひを語る！

夜のしづけさに

どんなにかおそれに吾等はうちふるふ

ベルの響のものうけなおどしの調に、

流れ出す響のままに

なげきの咽喉の

錆のなかを、

ああ、その人よ——人よ、人よ、

塔の上に住む人よ、

ただ獨りづつ

君等は鳴らす、鳴ら鳴らす、

口ごもる、ものうい音を、

光をみるか、回らしながら

人の心に石を回らし——

男でも、女でもない

彼等は人でも畜生でもない——

彼等はグールだ、

ベルを鳴らすは彼等の王だ、

彼はころばす、ころばす、ころばす、

ころばす、ころばす、

突貫のうたをベルからころばすよ！

その胸はよろこびうなる

突貫のベルの歌で！

彼はおどる、彼はわめく、

わめく、わめく、おどる、おどる、

(はつきりしない)調子の様で、

突貫のベルの歌に——

歌に、歌に、

おどる、おどる、わめく、わめく、

(はつきりしない)調子のさまで、

ベルをすすり泣かせるのだ——

ベルをベルを、ベルを、ベルを、

ベルを胸を渡うたせるのだ

ベルをベルを、ベルをベルを、

彼は不吉を鳴らす鳴らす、

幸ひなモウロウの調べのなかに、

ベルを鳴らす、鳴らす鳴らす、

幻
影

ベルをベルを、ベルをベルを。

ベルをころばす。

ころばす、ころばす、ころばす、ころばす。

ベルをベルを、——

ベルをなげかす、ベルをうめかす。

アルアラフ

その解説

一部——チコブラは常ならぬ美と輝やきとを持つた一星をかくしたと思はれてゐる、地上に於て美の人格化はニサスである。

彼女が唄ふとき、花々は彼女の唄を空へ傳へる、その唄の意味は、神は自身を美の權化とするといふのである、ニサスは人々につけるに、彼等が神を美以外のものと思ひなすは罪であるとした。

二部——ニサスは山上のバンテオンのやうな王城に急ぎ、すべ

ての輝やくものについて唄ふ、殊にラヴについて、夢や幻の集められてある中央には、死がある、でその詩人は悲みの装飾とともにアル・アラフを選ぶ、ここには一人の乙女と、乙女の愛人とが住んでゐるが、その胸の激しいときめき故に、ニサスの唄をきくことが出来ない。かくてアンヂエロとアンテとの物語りにつづく、彼は彼の死について、また、バルテノンから別れてきたことを語り、再び人間になりたいと願ふ、アンテは彼の現在の住居の方が地上よりは輝やいてゐると言ひ張る、アンヂエロは、アル、アラフに向つての遠い旅を語る、けれど、彼等の(胸の潮)が天の望みをしりぞけたから彼等は墜落した。

アル、アラフ——見えなくなつた星である。それは——數日間、ヂュピタアのそれよりも優れて輝やいたのであるが、——突然空に現はれたチュ、ブラによつてかき消されると、それ以後二度と現はれないのである。

一部

地上の何が光を保たう、おお麗はしい人の瞳の、

(その花々から消え去つて行く)

サアカツシイの寶石から生れ出る朝、

その園々のなかであるやう、——

地上の何が響を保たう、

森の小川のメロディのおおその身振ひ——

さては(激しい心の音楽)

歡びの聲はひそかに消えて行く

琴の餘韻のそのやうに、

おおそのこだまはのこるだらうか

のこるだらうか、塵の吾等に何かある！

けれどすべての麗はしい人——花々は、

吾等の愛に身をすまます吾等の額を飾るそれらは、——

ああ遙か、遙かの世界、——

さ迷ふ星を色添ふそれらは、

ニサスにはそれは楽しい時だった——

ここがねの大氣は彼女の世界をまろばせる

輝やく四個の陽に近く——暫しの安息——

それは砂漠の恵みのオアシス、

光の海をまろび行く——遙かに——遙かに

離なればなれの心の上を最高天の輝やく火——

その心(ああ濃厚な大浪よ)それは能はぬ

定めof天に至るあがきも、——

はるかな諸天、時より時へまろびゆく、

神の愛兒の彼女は吾等にはまだ來ない——

いま主權、運命の國の彼女は飛んだ、

亡者のはたを——兜を遺し

かくて天の靈氣の歌の香のなかに、

四つの陽の光のなかに沐浴する彼女の天使、

遙かかなたの愛ある地から（美の精神）は生れ出る

（あまたの散ばふ星のあひ間を花環となつて落ちてゆく

眞珠のあひまを女の髪が落ちるやうに遠くまで

丘丘の上、アツクイアンの輝やきがある）

幸福の極みのさては愛情の極みの彼女、

眺め入る永遠の奥——かくて彼女は跪く、

彼女の世界の雛型のうづまく似合ひの形象を、——

とりまく空の雲の重疊——

美しく——さへぎりはない、

光のなかをきらめく他の美の——

星々を織りこむ花環

彩りの帯のかたちのオパールの連なる大氣の、

彼女は急ぎ跪く花々の床、

百合の床にと、かくてその面を上げる

麗しいカボドカトの上に、さて、

たゞ一すぢにすがらんとして飛びも立つ、

深い誇りの——飛び行く歩調のめぐりにと——
肉體を愛した人の——それゆえに死んだ人の——
セファリカは若い若い蜂とともに蕾もつ、
その紫の莖は彼女の跪くまはりに起きる、
名も知らぬトレビゾンドの寶石の花、
空の星の一つであるそこでは外の
すべての愛も色を失ふ、その甘やかな露は落ちる、
(異教徒の知る物語めく神酒である)
それは空より滴つて人を酔はす、
禁制の園に落ちては
トレビゾンドの——さて陽の光輝の花の上に、

それは空のその源の泉のさまで、
いまも遣つて蜂をなやます、
狂氣にさては常ならぬ幻により
空のなかに大空に木の葉や花は、
その美しい悲しみの悲しみにある
——その不満なる嘆きは彼女の頭に降る、
おろかしい非業をくゆる——長い月日の、
その香ばしい大氣のなかに眞白な胸をのこして、
美はしい罪のやうに、いたいけに、なほ美しく、
ニクタンゼスも光のやうに聖らかな、
彼女は夜を香らせる胸のおののき

さてクリチアはあまた陽の間に思ふ、

氣ままな涙を唇に流しながらに、

地の上におどりはねたる熱望の花、――

生ると見れば死にたえる

靈にその香ある心をもやし

その道を空に求める王の國から

かしこにヴリシネールの蓮は流れ去る

ローンの流れに生をさけ、

ザントよ、お前の愛すべき紫の香よ！

イソラ ドロ！ フィオル デイ レヴァント！

永遠にただよふてゐるニランボの芽は、

印度のカピドの聖なる流れにおりて行く――

美しいその花々と、その精と！ 香豊かに

その愛撫、空に運ぶは神のうた、

(靈よ、住ふは空の

深所である

恐ろしいまた麗はしい

美の争ひよ！

その星は歩みを向ける

お前が覗ける

門やさては横木の方へ

その門は慧星ゆゑに

姿を消した、その誇から

その王座から落された——

その最後まで争ふた——

焔の運び手

(彼等の心の紅の火の)

疲れることのない、す速さで、

消えない愛ひを内にひそめて——

それはいまだに、生きてゐる——

永遠に吾等は感ずる——

けれど彼等の眉毛の影を、

どんな靈が現はすだらう？

その生命をお前のニサス

お前の使者は知つてゐるけれど

彼等自身の一つの模型は

お前の無窮を夢みてゐた——

おお神よ、お前の意志はなされたのだ！

星は高くを渡つて行く

数々の嵐を越えて、だが

お前の燃える瞳の下を乗り過ぎる、

思ひに沈みお前の方へ、——

その思ひこそただ一人

お前の王位を掲げるのだ、

またそれはお前の王座に坐れるものだ、——
翼をもつた夢により

私の天使はいだされる

そのとき秘密が明される

空の大きな輪のなかで、

彼女は死んで——埋められた、彼女の燃える

頬は、散ばふ彼處の百合の花のなかに、

彼の瞳の熱情から傘をさがした

恰も星は神の御前にうちふるへ

彼女は動かす——息づかず——恰も一つの音聲が

静かな大氣に嚴かにゆるぎ渡つた！

耳おどろかす沈黙の音——

夢みがちな詩人が(空の音楽)と呼んでゐるもの

吾等は言葉の世界にある、聲ひそめ呼ぶ、

(沈黙)と——すべての言葉で最もかほそい、

自然は一齊語り出す、心の物は、

その幻の翼から影ばむ聲をちらつかす、

だがああ！ それとは似もつかない、神の無終の

聲音がすぎる高い天の國々を、

そして空に紅の風は死ぬる！

(世界を眼には見えない時が馳せ行くけれど
かすかに體系づけられる、さては一つの太陽は—
そこではすべて私の愛はおろかしく、世の人々は
なほわがおそれを思ふけれど、夕立ちの雲、
嵐や地震、また大海は怒り立つ—
(おお！ それは私の怒の道に私と會ふだらう？)
世界にはたつた一つの太陽であれ、
時の流れが次第に暗くして行くのだ、
けれどお前は私の光輝、それ故に、
高い空に私の秘密を守つてゐる、
結晶體めく、その家を出よ、お前の従者と

月光の空を横切り飛び行けよ—
とほく— 恰もシシリイの螢のやうに、
他の光る星の世界へ飛び行けよ！
お前使ひの秘密をもらせ、
光り輝やく氣高い星に—
かくてすべての心の關門、籬となれよ
人の罪に星々が苦しませぬため！
ただ月の光ばかりの夜中に乙女は立ち上る！
地上に吾等は愛人に誓を立てる—
さて月に讚美をささげる—

だが若い美人の生れた場所は消えてる、
薄明に黄ろい星が浮ぶよう

乙女は花の床から浮ぶ

かくて輝やく上の上、仄暗い野邊に、

彼女の道によりかゝる——テラツシヤンの彼女の王位はもはや
ない、

二部

白蠟の頭の山の上高く、

眠けな牧夫が安々と、

廣い牧場のその床に、横はりつつ、

重い眼瞼をみひらいて

おどろきつぶやく(望みは既にゆるされた)

その時月は空にある——

薔薇色の頭は高々と

陽の光たゞよふなかに、沈む陽の

光を夕、捕へたが——真夜中のいま、

美しい、あやしい光をちらし舞ふ——

かく高々と華麗なる柱の林立

——それは軽い大氣の上に月が立てたる——

さて微笑みをちらりと投げる

遙かなバリの大理石から輝やく波のかしこへと、

かくてその寢所に若い山をみとりす、
星々は溶けて流れて街道をなし
黒檀の大氣に落ちるキラキラと
その解體の屍衣を光らせ、時に彼等は、
死にたえて、空の寢所を飾りつつ、
繋がる光の圓屋根を空よりおろせ、かくて靜かに。
柱の上に王冠のあつかひをもてのせおけよ、
金剛石が環づくれる窓をかしこに仰ぎ見る、
紫をなす大空に、
流星のつながる様に光あり、神より射られる、
かくて再び、すべての美をば聖けだたせる

かかる時、エンピランとかの環との、
あひ間に黒い翼をゆする、熱望の心を救へ、
だが、その柱の上に天使の眼はのぞく、
仄暗いこの世界を、灰色の緑の世界を、
それは自然が美の墓として最も愛した——
蛇腹のなかに埋もれて臺輪に卷かれ——
彫像の天使にまもられ
大理石のその寢所から覗き見る、
彼の凹所の影のなかに地のものめいた、
どこかの世界のアチエイの像のゆたかさ！
ペルセボリスやタドモルからまたバルベクから、

静かな清い深淵は、

その美はしいガモルラのそれは流れる！

おおその浪はお前の上にいまあるが——あまりに晚い、救ひに

は！

夏の夜に酔ひしれさせよ、愛のうたに、

それはほ暗い黄昏のささやきである、

エイラコにそれはしのび入るのである、

ずつと昔にまたいたあまたの星の耳の方へと——

それはしのんでくるのである、唄ひつつある人の耳へ

——その人は、遙かの暗い世界をみてる、

雲のやうに近づいてくる闇をみてる、

その聲高な、そのはつきりとした聲々、

そは——それはその姿でないか？

だがこれは何であらう？——それは来る——

ある音楽をともしなふてくる——それは翼のうちかわし——

一寸休んで——また掃くやうに——唄を落しつ

ニサスはこの時、彼女の部屋にまた部屋に再びでてくる、

みだらな人のそのはけしさに、

彼女の頬は忽ち染まる、唇は開いてる、

さて、しなやかな腰のまはりの、

帯はもえる彼女の重い心の下に、

その部屋に吐息、溜息、息をつき、

喘ぎしてゐる彼女、ザンテよ！

黄金の彼女の髪にキスする輝やく光は、

さて休らひを待ちのぞむ、だが輝やくきは消え去らない！

快いそのメロデーに花々は、

夜の若やかな花々は木々にささやく、

泉は唄をつづけてる、星影の數多の森に、

さては月の光の谿に落ち散りつ、

けれど沈黙はすべての、生のないものにある——

美しい花、花やく噴水、天使の羽搏き——

たゞひとり乙女の唄は、その靈からあふれいで、

胸を深く深くなやます、その唄は、

青い鐘やさては流れの、

さては繁りの枝の下、

眠れる人から月の光を遠ける——

輝やくものよ！ その物思ひ

半は眼を見開いて

お前の不思議が流れてきた

空の星の上にある

やがて彼等は眺め入る陰のなかへと、
やがてお前の頬へおりる
恰も——お前を呼んでゐる
乙女の瞳のそのやうに、
いまはお前の夢から醒めよ！
スマレの私室のなかになるて、
こんな星の奇麗な晩に、
それは似つかふつとめである、
あまりなさまたげ——
（おお、どうして！ お前がなくて
愛よ天使はめぐまれようか？）——

まことの愛のキスはキスは、
お前をすつかり休ませる！
立てよお前の翼から
その邪魔物を拂ひおとせよ、
その夜の露を、——
それはお前を飛ばせない、
けれど、守るよ、まことの愛は——
おお！ 去れよ、その
まき毛の上に輝やいてゐる——
胸の上へと降りて行け、

リギアよ！ リギアよ！

美しい人！

その粗い心は走る

調和のうたに、

おお！ それは微風の上、

つまだてて行くお前の心？

さては一人のアルバトロスの

夜に、もたれかゝるさま、

(彼女が大氣によりかゝるやう)

そのこはれやすい静けさ

よろこびに瞳をそそぐ、

その調和よいかしこの唄に？

リギアよ！ お前の

心象イマジがあれば何處どこでも、

魔術もお前の音楽を、

お前の身から離せはしない、

お前は多くの瞳をとらへる

夢みがちな眼のなかに——

けれど唄に休みはない、

夜つびてつづく——

兩の響よ

花の上に飛び降りつ、

さておどるのだ、

夕立ちの調のなかに——

のびた草からとびはねる、

その騒音は

物の音楽、

——だかああそれは型ばかり！——

愛する者よ、去り行けよ

おお急ぎ去れ、泉へと！

月の光に照りはえて——

それは清らにふしてゐる

また微笑める湖へ行け

深い眠りの夢にある、

さてかの星の島へ行け、

その胸こそは寶石に飾られてゐる、

野の花々はそこにはひ、

影をみだしつ

めぐりには

眠る乙女にみたされる——

あるは冷たい空地にのこり

蜂の眠つてゐるそばに寝る——

彼等をさませよ、わが乙女

林に野邊に——

行つて彼等の眠りの上に、

いとやはらかな息となれ、

静かな唄の數々を、

きいて彼等は眠りについた——

何が眠りをさまさうぞ、

天使をかくもすみやかに、

冷たい月の下にねる

天使の夢をさまされよう

魔術の眠りも及ばない

その休らひを、

音楽のそのかすかすが眠らせた

その眠をば？

飛ぶ靈やさて天使、數限りないセラフの群は、

エンピランからあふれ出る、

けれど若やぐ夢々は重い翼になほも飛ぶ、

鋭い光、(明智)は落ちて、

セラフはすべてはるかにお前の世界を過ぎる、

おお死よ！ 神の瞳からかの星へ去る、

それは邪路、だが快い——死はなほ甘い、

邪路は甘い、——吾等はたとひ、

沈黙の息氣に歡喜の鏡を曇らされるとも——
シモンであつた、それは——かくて壞れよう——
眞はいつはり、——惠みは嘆きであることを、
何がそれらに知らせるだらう？
彼等の死滅は快かつた、その満ち足つた
生涯の最後の無我に繁々と死ぬ——
その死の彼方に不滅なものはありません——
こがれた眠りは（ここ）にはない——
彼方にもああ！ 私の疲れた靈は、
永遠の空よりさかる——だが地獄にも遠いことよ！
どんな暗い林のなかにどんな罪の靈が、

唄の啓示を聞いたであらう？
けれど二人は彼等は落ちる、高鳴る胸が、
それをききはしなかつた故、天の惠みはとどかない、
天使の娘よ、また彼の人のセラフの愛人、
（お前等は空をはるかにさぐるだらう）が
ああ何處に愛があつたか、盲者よ、義務は知られてゐるが？
放たれた愛は落ちた（悲しみばかりの涙）のなかへ、
彼は落ちたが——善良な靈だつた
苦むした井戸の周圍をさまよふもの、
空に輝やく光をちつとみつめるもの、

月影に、その愛人を夢みるもの

それは何を思ふであらう？ 星々は瞳をひらき、

美しい人の髪をうつとりと見おろしてゐる、

それはまた苔むす泉とともに聖い、

愛を負ふ心にとつてまた憂鬱だ、

(彼には悲しい夜であつた)

若い天使が山の巖の上にあるた

厳かな空に脊をむけ、それはふしてた、

また空にちらばふ星の世界は眉をひそめさす、

その愛人とともにあり、みちたらひつつ、

彼の黒ずむ眼は熱心に空に馳せたが、

今や彼女の上に落ちた、

だがそれはまだも地球におののいてゐた、

(愛するアンテよ見よ！ どんなにか光は霞んでゐるだらう！)

どんなに親しく、ああ遠く見えることよ！

彼女は秋の夕にはそんなでなかつた

だから私は華やかな彼女の部屋を去つてきた——悲しみもなく

私は、はつきり思ひ出す、ああ、その夕、

レンモスに不氣味に落ちる陽の光、

飾られた部屋の彫刻、アラベスクの上に、

そこに私は坐つてゐたが、暗い井戸にさしてはまた、

暎の上に、——おおどんなにか陰氣な光よ！

花々の上、霧の上、愛の上をと、

グリスタンを、ペルシアのサアヂとともに彼等は走る、

けれどその光はどうだ！——私が眠りに入つてゐたとき

愛する島の、吾が感覺へ、死は這ひよつた、

それは靜かに、一本の絹の髪も、その眠から、

さめやらず——そこに死がゐるのもわからず、

私が最後に踏んだ地上は、

名だたる寺院、バルテノンが立つてゐた、

そゝり立つ壁は一入美しかつた

張りきつて、波うつお前の胸よりも、

昔のことに私の翼はつなを解かれて、

私は飛んだ——その塔から響か飛ぶやう、

かくて年々暫くの間を身をかくしてゐた、

大氣の世界に住んでゐた間に、

地球の園は半は消えた、

わが眼の前に海圖のやうにめぐらない

砂漠のなかに捨てられた市！

アンテよ、優美は私の上に群つてゐた、

私は再び人になりたい、

(わがアンヂエロよ！ なぜにそれを望むのか？)

ここにはなほも輝やく世界があるではないか？
かしの地より緑の深い野邊があるのに、
女の愛が——激しい愛が、)

(けれどアンテよ！ きけよ、大氣が柔かに落ち、
わが軽らかな靈は高く揚つた、

かくてわが意識は曇らう——私が去つた
世界は晩く混沌のなかに消えた

その住ひよりはるかの風に、

焔の天に火の輝やきにまろんで行つた、

思ひ見よ、わが愛人よ、わたしの飛揚が止んだとき、

私の落下は——私が前に立ち上つたそれより速くはなかつたの
だ、

だが下向きに顛へる心に落ちる先

光、黄色な光のなかを黄金の星の世界へと！

時間はそんなに長くはなかつた、

すべての星から吾らのそれへお前はぐつと近かつた——

悲しげな星！ よろこびの夜に來た顛へる

地上に赤い月明よ、)

(私等は來た——お前の地まで、だが吾れ吾れに
吾等の姫の指示は論ぜよとて下らない、

螢の青さに、その夜吾等は來たり行つたり、

天使のうなづく外に何の理由も問はず

彼女は神が與へたやうに吾等にゆるした、――

けれどアンヂエロ灰色の時の翼のそれ以上、

なほ美しい世界に彼の美しい翼はうたない、

霞んだ小さいその鏡、エンヂエルの眼は、

ひとり空に幻影を見る、

最初のアル、アラフが星の海のなかへと、

まつさかさまに落ちて行く理由を解したその時に、

けれどその榮は空にひろがつたとき、

それは恰も人の眼の下に美の芽がそだつようだ、

私等はさて、人間の相續權の前にとまつた、

そしてお前の星はふるへた――美のそのやうに！

かく議論の間に夜を過した、

その夜は來らず、また再び陽をもつても來ない、

彼等は落ちた、天に誓つて、彼等に希望は來らない、

彼等は胸の高鳴りをもはやきかない、

精靈境

暗い谷々——影さす流れ——

雲おほふ森、

それらの型を吾等は見出し得ないだらう、

涙をすつかり涸らすとも、

大きな月は、満ちつゝかけつ、

——くりかへし——またくりかへし——くりかへす、

夜の時々、

いつまでも場所をかへ行く——

そして彼等は星の光を追ひ拂ふ、

呼吸とともに、その青ざめた顔の上から、

月の時計で十二時頃、

他のよりずつとモウラウとした

(さがし求めて、

見つけた、もつといいものの一つ)

それはおりる——降りてくる——なほ降りてくる、

心とともにてつぺんへ、

山の高みのてつぺんへ、

その広い廣がりへかけ、

たやすく、毛布をふりかける

小屋の上、さて堂の上、

できるところはすべてみな、――

奇妙な森や――海の上――

翼をはつた魂も――

眠けなものにすつほりと――

それらを埋める

光の迷の宮のなか、――

深く、深く、どんなに深く！

眠りの激しい心であるよ！

明方それらは起き出でる

月の光の覆衣、

それは空へと昇つて行く、

彼等があける嵐とともに、

――どんなものでも――

さては黄色な月であつても、

もはや月はいらないだらう、

おなじ めあてで、

それ故テントを

おどろけば

その微粒子は散つてゆく

聚雨となつて

そこから地上の

蝶が飛び立ち、空をさがす、

そしてまた、降りてくる

(おお心、たらはぬ者よ！)

一つの型をもつてくる

そのふるへてる翼の上に、

落ちつきのない谷

一度は微笑をしたこともある静かな谷

そこには人が一人も住んでゐなかつた、

幾度もの戦争のため皆出て行つて了つたから、

あのやさしい、またたきをする星々に頼りをおいて、

夜深く、あの空色の塔を出で、

あの花々の安否をちつと守らうと、

その花々のまんなかには日がな一日、

真赤な真赤な陽が眠つてゐた

けれどもいま訪問者らは言ふだらう

悲しげに谷はもはや静かでないと、

そこは激しくないものはない——

不可思議な寂しさの上、

抱く大氣を散らすものはありはしない、

ああ大木をゆるがす風はどこにある

木々は霧のヘブライド

とりまく海の凍えたるそのさまに似て息をつく！

ああ雲を運びさるよな風もない、

朝から夜まで安心なく

さわぐみ空をかきみだす、

葦の花におひかぶさる、

その花々は人の眼の数限りないさまをして——

また波をうつ百合の上もゆきすぎる、

花は名もない墓に泣き、

波うつてゐる——その香より先々から

永遠の滴が露とこぼれてゐる、

百合はなげく——彼等の美妙的な小莖から

たえまなく涙は玉とおちてゐる、

魔宮

谷々の濃い緑のなかに、
善色な天使らにより建てられた
かつての美麗な嚴めしい城——
かがやく王城——屋根を聳だつ、
天子の(心)の領土のうちに
私は立つた
その半がた美麗な域にも、
翼をおほふたセラフもなかつた、

榮えある黄色や、さて黄金の旗、
その屋根の上、浮きつ、流れつ、
(これはみな——これは——むかしの
すつと昔のことだつた)
もつれる大氣のなごやかさ、
快い日に
飾られた、だが蒼白の砦とりでに沿ふて、
飛んで行く香を流がす、

幸福なかの谷々をさまよふ人は、
二つの輝やく窓を見入る、

靈はあまた樂のうごきをうごく

調べよい琵琶のおきてに、

そこに王座によりかかる

(ボルフィロヂエン！)

彼にそぐうた光榮のさま、

王土の主權の姿は見えた、

眞珠やルビーはすべてみな、

美麗な城の扉をちりばめ

そこより流れ、流れ流れた、

きらめきつ、おわることなく、

(こだま)の群が、それらの可憐な、

つとめは歌を歌ふばかりだ

優に奇麗な聲々に、

機敏で賢い王のため

けれど悪魔が悲しみの衣をかつぎ、

王のけだかい御座を穢した、

(ああ、吾等を嘆きにまかせ！ なぜとよ朝は、

寂しい彼に白むことはありはしない！)

彼の家庭ホムをとりました、

珠の花咲く光榮は、

ほの暗い記憶の花にすぎなんだ
墓に埋れた古い月日の、

かくてさまよふ人々は、その谷間では、
赤い光の窓にみる、

霧のかかった姿、姿が

夢のやうみだれた調子に動くのを、

それは魔性の急流だ、

青い扉は

悪魔の群が永久飛び出る

そして笑ふ——けれど微笑はかへらない、

夢 境

小暗い寂しい道のほとりに、

住んでゐるのは悪い天使の群ばかり、

(夜)と呼ばれる幽霊が

闇の王座に厳然と坐す、

私は今度涯々の暗いツールを

いでて此の地へついたので——

広がる野趣な凄い國から

苛酷な(空間)——(時間)をのがれて、

底のない谷、岸のない河、
穴や洞やチタの森林、
人にもつかりやしないその影、
涙がすつかりおほふてるから、
山々は岸邊もなくて
永遠に海にのびてる、
波だちつ、小やすみもなく、
あこがれる焔の空に、
はてしなく広がる海の、
さびしけな波、——さびしけな、死にたえてる——
静かな波、——静かな凍えた、

めぐる百合の雪とともに、
さびしけな、死にたえてる、さびしけな、
波のゆくはて、海のほとりに——
悲しけな、凍えた波の悲しけな、
めぐりゆく百合の雪とともに——
山のほとり——河に近く、
低くさざめく、長くさざめく——
灰色の森のほとり——濕地のほとり、
ヒキガヘル、井モリが住ふ——
物凄しい沼地のほとり——池のはた

喰屍鬼^グが住ふ——

ひどく穢れた所々に——

ひどく陰氣な隅々に——

旅するものは(過去)のつらなる

(記憶)に會ふて身振ひする——

さまよふものの傍をすぎて

つつまれた姿はおそれ、ためいきする、

交はり長い友の白の衣姿が——

くるしみに(地)へ——さて(空)へさまよふとき、

群れなす嘆きの心には、

それは平和な慰めのある世界である、

陰をさまよふ心にとつて、

それはおお、黄金^{エルドラド}の郷だ！

旅人はけれど——すつかり見はしないだらう、

黄金の郷を旅しながらも、

その不可思議は弱つた人の瞳をば、

開けることは決してない、

そこの王はかく望む、王は禁じた

まつ毛のふさの眼瞼を上るを、

かうして此處を通る心は、

暗い眼鏡を通してそれを見るばかり、

小暗い寂しい道のほとりに、

住むのは悪い天使らばかり、

(夜)と呼ばれる(幽霊)が、

闇の王座に嚴然と座す、

私はこんど涯々の暗いツールを

いでて故郷へ、だが新らしい故郷へさまよふ、

エドガー、アラン、ポーの詩論

近代の詩が新らしい傳統を持つやうになつたのは、かのシャルル、ボードレエル以後と言はゞ言へる、彼は、ポーが會つて言つた詩が道德乃至眞理の下に附隨して、それを歌ふ時代は過ぎた、詩は詩自身の進路を持つべきであると言ふ信條を新らしい詩の傳統に築いたからである。ポーがそのボードレエルの父と呼ばれ、その最大の創作は小説でも詩でも評論でもない、シャルル、ボードレエル自身であるとまで言はれてゐるのはいみじい言葉である、まことにポーは詩の新時代より生れることが早すぎた、そして時

代の力を享けたポードレエルは、まったくポールの全體と、ポール以後のものをより多く享けてゐたために、謂ふところの傳統の裡には數へられないであらう、扱かゝる事は數多くのポールの研究書類に依られることを希望し、彼のかゝる意味で近代の詩の黎明に於ける近代性についての、彼の最も態度の明らかな詩論について少しばかりの瞥見をしたい。

ポールの詩論と言はれるものは、私の知つてゐる限りでは三つを出でない。これは『詩の本質』(Poetic principle)『文章構成論』(The philosophy of Composition)及び『詩句の原理』(Rational of verse)の三論文である。そして謂ふならば、第一の論文を除く他の論文は彼の散文上の技巧を多く論じ他は英詩の音律に就いて、前世紀

の詩歌の上に加へられたもので、既にかゝる型式及び音律の約束及至傳統の觀念に基かない、また本質に於いても何等影響をもたないであらう日本の詩壇にとつては他山の石であらう。それらも何れ私か、またはよりよい紹介者の手に依り後日を俟つことを希望し、茲では『詩の本質』に就いて一文を草することにす。

『詩の本質』のなかで第一にポールは謂ふ「私は多少特殊な、而してそれは正當であるか、誤謬であるかは知らないが、一つの原理から出發する」としてそれは「私は長い詩は存在し得ない」と言ふのである。茲で彼が言ふ長い詩と言ふのは Minor poem (マイナー、ポエム)の反對で、長さの長い詩のことである。乃でポールは「長い詩と言ふ熟語は單なる名辭上の矛盾である。言ふまでも

なく、詩は唯、それが人を興奮せしめる靈魂の高揚 (Elevating excitement of the Soul) のみに依つて其名辭に價する。そして其價値は感激の高揚の度に比例する」と更にそれを布衍して「所で總ての興奮は生理的不可避から一時性のものであり、この興奮が山來するのは詩の構文が長いと言ふ爲ではない以上、せいぜい關の山である半時間も經過せば、興奮は懶け——衰へて——反動を誘起する。而して事實、結果として、詩はあまり長くはあり得ないことになる」と、その例として彼は擧げるにミルトンの失樂園 (Paradise Lost) を以てし「疑も無く、この批評論を爲さうとしたものが、唯漠然と立派であると讃嘆されるべきもので、殆むど閲讀中に於いても、批評論が必然とする熱力を完全に保存することの不可能

で、困難を感じたものも尠くはあるまい。この傑作も技巧、連鎖を除外してしまふと、初めて詩と呼ぶことが出来、又それが單に「短詩」の幾章として見ることが出来る。若し連鎖的に見るならば、或章は眞實の謂ふところの詩であり、次に續く一章は (必然的にだが) 陳腐に堪へられない、いかにしても我々が賞讃をなし得ないものである。」と、暗に彼か何より嫌忌してやまない眞理の觀念がそれに屬することを意味し、續いて、「暗黙にも公然にも、直接にも間接にも、詩の究極の目的は眞理 (Truth) に在るとせられ、總ての詩が道德を教へねばならないとせられてゐる。又この道德に依つて詩作が評價されてゐる。このお目出度い觀念は特にアメリカ人によつて支持され又我々ボストンの人間に依つて充分

に發達させられてゐる。が、我々が考へるには詩は詩のためにのみ書かれねばならぬ、又詩想も自らのものであり、根本的に、眞實な詩の莊重と熱力に向つて自己を表白せなければならぬ、——單に言ひ替れば、自己の靈魂の裡に視入れ、さうすれば、倏ちにして我々は此世界に未だ會て存在し、又存在し得ない實に高貴なものを發見するであらう。それこそ、此處に言ふ、單に詩、書かれた詩、また、全く詩のために書かれた詩よりも尊崇で高貴なものである」と心性のいみじい心象 (Image) の世界を高唱し、翻つて「總ての詩作に在つて冗長と化し、然も要求するところのものが嚴格である眞理なるものは、言つてみればマートルの花に心をよせない。又小唄などに缺くことの出來ぬものは、恰度、この眞理

を以てしては如何とも爲し得ないものである。實にそれが強調される場合には、言葉の開花よりもむしろ嚴縮を必要とする。然るに我々が欲するものは、素純、明確、平明であり、また平靜、温和であつて、激情なるものを忌む、そは出來得るならば、正しく詩的など呼ばれる情調に没入することである」と、詩に於ける眞理の存在が、水と油のごとく相容れぬことを説いて、次に彼の詩的な情調 (Poetical mood) に論及してゐる。

彼は言ふ、「心意 (Mind) の世界を三つの部分に區劃すると、純智 (Pure Intellect) 趣味 (Taste) 及び道德觀念 (Moral Sense) となる。私はその裡で趣味を中央に置く。何故ならば、其處は恰度心意の裡でそれが占めてゐる位置であり、兩者の一端に密接な聯關をも

つてゐるからである。次に其職分に就いて見るに、智識が眞理に關係し、趣味は美を形成し、同時に道德觀念は義務に對してゐるのを知る。而して、この最後のものに就て言へば、良心が責任を教示する一方に於て、理性が自己的の方便を教へる。が、それ自身恍惚 (Charm) の表明を以て満足とする趣味は、つねに偏形や不釣衡や缺點を、的確また調和あるものに向けて力を竭してゐる。

——換言すればそれは美に向つてある。

まことに人の精神に深い不滅な内部力は、かかる美なるものの感覺である。又それが、かの多様な形體、音響、香氣、又我々を圍繞する情緒の満足を支配する」と、ポーは美なるものの本然性を、我々の前に抽出し、其處より、彼一流の美觀を初めやうとす

る。「然しかゝる素材が、いかに文字化され、語られるとも、これは必ずしも美ではない。それは單なる再現にすぎぬ、美なるものは、かゝるものが、いかに (それが二重にも) 如實に叙述されるとも、それは唯、この崇高なるものを表現するに失敗してゐると言ふにすぎない。其處には、かく努める者が、未だ到達し得ない遠方に何ものかゞあり、それが容易に、我々のかゝる渴を醫しては呉れぬ。この渴きこそ。人間の永遠なるものに屬し、かゝるものに對する希願は——蛾の星へのそれにも似て——我々に手近い美を單に感知することではなくて、——それは結果として各人の永遠への存在の證左であるところの上天沓かな美へ到達しやうとする眞摯な熱望である。然して、斯く詩に音樂に、それが永遠なる

ものに屬するであらうその恍惚的な先見に刺戟せられて、詩的情調なるものゝ要素それ自身である好ましき (Loveliness) に沈入しやうとする時、纔にその扉口に於いて、我々は涙の裡に融けてしまふ。それは歡びのあまりではあるが、また然し、暫くして我々は、全く瞬間にも永遠にも、けに詩を通じて音樂を通じて、我々がほんの僅かにまた不定な片影を認めるにすぎないところの、この崇高な放恣な喜悅を把握しない或る焦燥な耐へがたい悲哀につまられる。この崇高な好ましさに到達しやうとする努力こそ、實に世界に未だ理解せられなかつたものを、詩なるものとして感知し得るやうにした」と言葉を結んでゐる。

次に彼は言葉を換へて詩的情操 (Poetical Sentiment) と律調 (Ry-

thm) に就いて言ふ「詩的情操は多様に展開するであらう、繪畫、彫刻、建築、舞踏、又廣汎な意味に於て築園などに、が茲には、主題としてそれが言語の示性について語ることにする。先づ私は詩にとつて種々な音節 (Metre) 律調 (Rhythm) 脚韻 (Rhyme) 等の形式をもつてゐる音樂的的確性に満足を感じるので、それが極めて重要で、決して疎外は出来ないものとする。實に適切に緊要な附屬物として、その補力を思はない者があれば、それは單にその者の無能を示すに過ぎない。詩的情操に刺戟され、それが崇高な美の創造に努めるとき、靈魂がその目的にやつと達し得るならば、それは音樂の裡に於てゝあらう。然して、茲にこの卓絶した目的があり、また屢々事實に於て到達せられるのは可能であらう。」と微笑

し、次に彼は「言語に於ける詩は美の律調的創造であり、その唯一の支配者は趣味である」と定義し「主智及び良心なるものは支葉の關係にすぎぬ、それが偶然であれば兎に角眞理又よ義務の何れにも關係がない」と述べてゐる。

扱ボ―はかく總てを示した上更に全體に亘つて次の様に言つてゐる。

「常に最も純粹で、高揚的で熱力的な愉快は、深い美の凝思から來るものであり、美の凝思に依つて、我々は唯、我々が詩的情操と信する處の靈魂の興奮、又は愉快な高揚に達し得るのを知る、然してこの詩的情操は理性の自足である眞理、又は心の興奮である情熱からは容易に差別せられる。故に私は美なる文字に崇高な

意味を加へて、それを詩の範圍に入れる、何故ならば、それは非常に明白な藝術の法則である處の効果をその原因から出來るだけ直接に喚起し得られるからである。」と述べ更に諄々と熱情の興奮、義務の教戒、眞理の教訓等の詩の裡にとり入れられるべきでないことを説き、「かく詩の本質はいとも崇高な美への人間の熱望であり、又、心の熱酔である情熱とも、理性の自足である眞理とも全く獨立したものである靈魂の高揚的な興奮に見出される。何故なら、(それは悲しむべき考へではないか)情熱なるものもそのものものは靈魂の高揚ではなくて壓伏であるからである。けれど、その反對に、いとも眞實で神聖なエロス、戀愛は、言ふまでもなく總ての詩の主題として最も眞實で最も純粹 (Pure) なものであ

る。」と然してポーはアルフレツド、テニスンを拉し來つて「私は彼を最も立派な詩人と考へ、又呼んでゐる、が、それは、彼の與へる印象が常に最も深遠であるが爲ではなく、また、詩的興奮が常に最も強力であるが爲でもなく、それが、常に最も波動的 (Ethereal) であるが故である。言ひ換へれば、最も高揚的で、又最も純粹であるが故である」と述べてゐる。

以上で彼の所論だけは大體要説出來たと信じる、が、私は茲で、二つのことを参考までに附加へて置きたい。一つは、ポーはこの論文の後半で、對象として眞理をより多く攻撃してゐるのは、他に、彼が好まなかつたロングフェロー一派を暗に指示してゐるためで、今日となつて、彼の元氣な稚氣に過ぎぬやうな節もあるこ

と、も一つは、彼の科學的直覺が、彼が多くの散文に示してゐるやうに、犀利に動いてゐることを、彼の美的情操の裡に見逃してはならないことである。

春 山 行 光

製 複 許 不

大正十二年七月七日 印刷
大正十二年七月十日 發行

泰西詩人叢書 (第五編)

求才全詩集 [定價金二圓十錢]

譯者 佐藤 一英

東京市牛込區橫寺町四三

發行者 後藤 誠雄

東京市京橋區榮地二ノ三〇

印刷者 川崎 佐吉

發行所

東京市牛込區
橫寺町四十三

聚

英

閣

振替東京四七八六九
電話牛込四六二番

本 製 神 福

現代文壇諸名家傑作

- 二人の稚兒……………谷崎潤一郎
- 屋上の狂人……………菊池寛
- 雪の夜話……………里見淳
- 未來の天才……………豊島與志雄
- 幼年の思出……………相馬泰三
- 或女の死……………徳田秋聲

◇ 日本文壇の眞髓を學ばんとする者の唯一獨歩の傑作集 ◇

潮風

- 菊半截優美
- 在田稠氏裝幀
- 定價九拾錢

現代傑作選集 第一編

聚英閣

東京牛込區横寺町三番
東京東區四七六九番

泰西詩人叢書

8	7	6	5	4	3	2	1
キイツ詩集 渡邊正知譯	ユーゴー詩集 加藤利美譯	ブレーク詩集 渡邊正知譯	ポー全詩集 佐藤一英譯	佛蘭西近代詩集 藤林みさを譯	バアンス詩集 生田春月譯	エマソン詩集 中村詳一譯	シエリー詩集 牛山充譯
”	”	近刊	”	” 、九〇	” 、八〇	” 、八〇	定價 、八〇
				”	”	”	送料 〇六

現代文壇諸名家の傑作

現代傑作選集 第二編

美の果

◇「潮風」の續編、日本文藝思潮の主流たる代表的名作集◇

- エロスの戯れ……………久米 正雄
- 或女の幻想……………佐藤 春夫
- 娘……………藤森 成吉
- 愛犬物語……………加藤 武雄
- 嬰兒殺し……………山本 有三

□ 菊半截優美
 □ 在田稠氏裝幀
 □ 定價九拾錢

聚英閣

東京牛込區寺町三四番
振替東京四七八六九番

現代文壇諸名家の傑作

現代傑作選集 第三編

花枕

◇輯めるもの文壇老練の士の名作六編。傑として金玉の如し◇

- 魔術……………芥川龍之助
- 山の湯……………吉田絃二郎
- 二階の客……………加能作次郎
- 八木彌次郎の死……………宇野浩二
- 罪……………水守龜之助
- 宵の空……………久保田万太郎

□ 菊半截優美
 □ 在田稠氏裝幀
 □ 定價九拾錢

聚英閣

東京牛込區横寺町三四番
振替東京四七八六九番

4

文學博士 三宅雪嶺序 四六判總布裝
法學士 星 利彥述 特製函入美本

ベントリ若返り運動法

定價二圓
送料十七錢

ベネット氏曰く 私は五十歳に於て癱疾の老人であつた、そして七十二歳に於て再び青年となつた。今の私は肉體も容貌も將た精神も三十五歳前後の如きものも變りはない云々

本書は理論の説明に非ず、経験其物の記述にして毎朝僅か十五分間床上に安臥して簡単な特種の科學的運動を試むれば絶體に健康を保ち得る眞に人體改造の奇績で國民保健の鍵鑰なり、原著書が忽ち數百万部を賣盡して米國讀書界の新記録を作りたるは怪むに足らず

法學士

法學士

若返り運動法

法學士

法學士

利

389
87

Handwritten scribbles consisting of three vertical wavy lines and a vertical line with a zigzag pattern.

終

